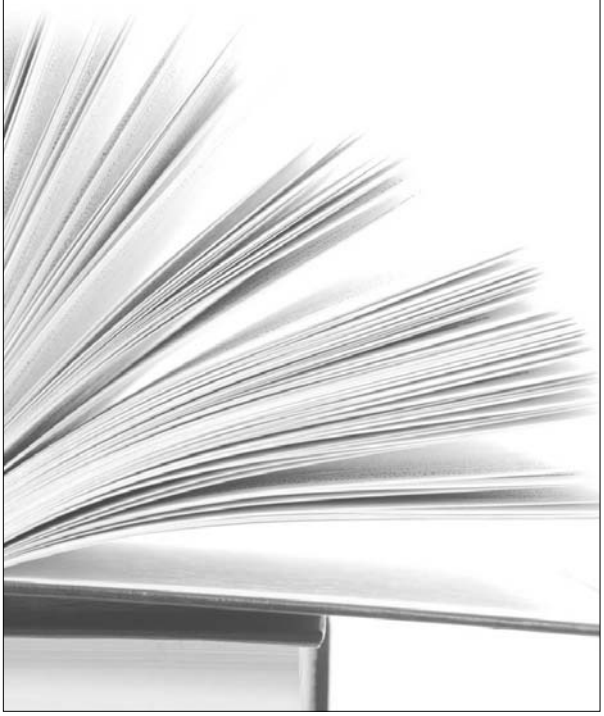
寄稿
3

紀伊大島における伝統的植生管理

―ユリ科タカサゴユリからの教訓―

京都大学
フィールド科学教育研究センター
紀伊大島実験所 所長・准教授

梅本　信也



本州最南端は串本町の東方沖1.5kmに位置する紀伊大島は東西6.3km、南北3.2km、面積9.89㎢の台地状で、やや南に傾いている。かつての海底火山活動によって形成されて隆起し、約1000万年もの時間をかけて風化しつつある熊野酸性岩類を主体とする地質が主体である。最高標高は島中央寄りにある大森山頂上部の171.7mである。真冬でも18℃もある暖流黒潮の影響を受けて温暖であり、年平均気温は16.9℃、年間降水量は2,500～2,600mmである。気候的には暖温帯に属し、漁業を主な生業とする島民が保全して来た良好な魚付林やかつて薪炭林として持続的に活用されてきた照葉樹性里域林に覆われている。線状谷部は湧水が豊富で昭和後期までは水稲作が盛んであった。紀伊大島は離島であったが、1999年9月9日に串本大橋の架設によって本州と久々に地続きとなった。その結果、多数の外来性植物が無秩序に島内に侵入することになった。その一例がユリ科タカサゴユリである。

タカサゴユリ（高砂百合）*Lilium formosanum*は台湾原産で、日本には1923～1934年に観賞用として導入された。現在は国内の琉球、九州、四国、関東以南の本州、東北地方の宮城県や福島県に分布している。鱗茎による栄養繁殖だけでなく旺盛に種子繁殖も行い、荒地や路傍、堤防、高速道路法面沿いに分布を広げている。平成初期には夏咲きであったが、最近は四季咲化しつつある。環境省はタカサゴユリの駆除を呼び掛けているが、根絶はいささか困難である。南紀には第2次世界大戦直後に田辺湾経由で持ち込まれ、引揚者達が白浜平草原で開拓団を形成、台湾原産のタカサゴユリを換金作物として活用しようとしたが、諸事情で頓挫したそうだ。1950年代には古座川中流域での七川ダムの建設に伴って、周参見方面からタカサゴユリが熊野地方に進出した。紀伊大島には1970年頃に初入島したが、大集団での入島は串本大橋供用後である。串本大橋に接続する新県道沿いの法面に咲き誇る白く高貴な花のタカ

サゴユリ大群落は壮観である。

京都大学フィールド科学教育研究センター里域ステーション紀伊大島実験所は紀伊大島の中央部の須江地区（北緯33度28分、東経135度50分、標高約100m）に位置する。実験所の敷地面積は11.75haである。京都帝国大学大島暖帯植物試験地用地として、昭和12年5月1日に和歌山県東牟婁郡大島村から和歌山県を経て無償で寄付された。実験所内の植生は70年以上保全されたスダジイやヤマモモ、ヤブニッケイ、クスノキ、シラタマカズラなど多種多様な照葉樹林であり、当時の里域薪炭林を髣髴とさせる。実験所全体は林床植物で絶滅危惧種でもあるショウガ科アオノクマタケランと関連させた上で、和歌山県鳥獣保護区に指定され、鳥類や昆虫類が実に豊富である。

実験所構内中央部の建築群の周囲は当初、人為的に導入された西洋種の芝が栽植されて欧風的景観を呈していたが、管理様式の変更や植生遷移などによりイネ科のチガヤ、ススキ、シナダレスズメガヤ、シロツメクサ、ヨモギ、ツリガネニンジンなどが主な植生となり、種パッチ同士が混交し、種内変異型同士が適度にすみ分けて落ち着いた風情を見せている。緑豊かな実験所では芝生地を対象の植生整備が冬と夏の合計2回程度行われる。管理は熟練した地元の職人が行う。肌理細やかな植生整備には注意深い観察力が必要であり、したがって、昔ながらの草刈鎌が最適なのだが、作業効率のために仕方なくガソリンエンジンで動く回転式草払い機を多用する。

紀伊半島では最も早く訪れる春先頃から勢いよく生長する植生構成植物は6月ごろには膝前後の草高となる。この高さは日本人に草刈を要求する心理的圧迫を大いに与える量である。除草は出来るだけ地際から刈り取るのが理想であるが、隔靴掻痒の感のある回転式草払い機を見事にこなしつつ、熟練した職人達により見る間に処理されていく。剪定作業と同様に種毎に伸長速度や方向が異なるのだが、それを見極めながら2〜3週間先の仕上がりを想定して草刈を行っているのだ。丁寧な理髪師による頭髪管理と同じである。草刈直後あるいは数日後に熊手でかき寄せられ、成長点だけを残した柔らかい絨毯状の植生が完成する。

ところが、整備された植生をよく見ると刈り残されている植物が認められる。その代表がユリ科のタカサゴユリである。大きく成長した個体だけでなく、時には幼個体も刈残されている。除草されなかった理由は、職人達は地域での自らの経験や価値観、美意識、今後の利用性観察や判断に基づき、刈ってしまう植物と刈り残すべき植物を無意識に選択して作業しているからである。これは選択除草と呼ばれ、新規な植物種の利用や植生の有益化に大変に重要な行為である。タカサゴユリは白い清楚な花を咲かせてくれる上、近い将来において何やら有益そうだからである。本来は除去すべき植物なのだが、将来において有望であり、進化の枝を剪定せず保護すべきだと考えているからである。

選択除草の結果、刈残されたユリ科外来種のタカサゴユリ（細葉）とショウガ科在来種のアオノクマタケラン（広葉）

紀伊大島ならびに南紀地方ではタカサゴユリ以外にもキク科のアキノノゲシ、ハルノノゲシ、セリ科のアシタバ、トウダイグサ科ポインセチア、ショウガ科アオノクマタケラン、供花植物であるツバキ科サカキの代用木であるヒサカキなどが無意識的に刈り残された植物の範疇となる。こうした植物群は奨励段階の雑草encouraged weedあるいは奨励段階の植物encouraged plantとも言われる。すなわち、栽培植物段階までは達していないが、その利用価値を観察されている、あるいは試されている段階の植物であり、地域文化を育む里域植生を構成する要素として適正かどうかの面接的な段階にある。

選択除草とその結果生じる奨励段階の植物は小まめな手入れが日常的に行われ、異系要素の繰り込みが頻繁に生じても破綻しない文化豊かな里域の典型的な風景の一つであるが、紀伊大島では選択除草によって、新たな栽培化が着実に行われ、地域の文化ゲノムに組み込まれようとするシーンが多く見られる。これは紀伊大島では伝統的な植生管理自体が固有要素や異系要素を分け隔てなく扱い、俯瞰的に相を管理するという発想が根付いて来たからである。タカサゴユリが南紀における戦後の帰化植物であり外来植物であるという素性は彼にとって重要ではない。こうして奨励雑草を含む植生は里域における文化向上、亜文化準備を目指して更なる変異要素を備蓄していくことになる。有害な植物、一見役に立たない植物を中立な存在に変え、さらに利用価値を見出し、そして地域に欠かせない宝物的な植物や植生に磨き上げるという考え方やその実施者である俯瞰的賢人が地域や地域文化の練成や醸成には不可欠である。通時的共時的に事物を俯瞰できる賢人はかつて日本津々浦々に存在した。しかし、そうした人材は殆ど絶えつつある。紀伊大島も過疎化が進み、知恵や技術の伝承は断絶しつつある。一見は役に立たず、有害な植物を悪い事はしない程度に変容させ、さらに有益で持続的な素材に変え、文化要素として繰りこみ、そして地域における植物文化の核とする流れが絶えないように21世紀の私達は協働的知恵を油断なく働かせねばならない。人材論あるいは人事管理で言えば、人罪→人在→人材→人財という流れを作れる組織と管理者の確保と同根であり、こうした事柄を紀伊大島の伝統的植物管理手法と異国出身のタカサゴユリは私達に教示してくれている。

なお、本稿は和歌山社会経済研究所理事長である片山博臣氏からの寄稿要請に従い、京大紀伊大島実験所発行の「古座川合同調査報告集第1～8巻」「紀伊大島のイノシシ―里域保全論への招待―」「紀伊半島南端の植物文化と食文化―里域保全論への招待―」「紀伊半島南端の植物―里域保全論への招待―」「紀伊半島南端の古景観―里域保全論への招待―」などに所収の論文に基づき、追加修正して作成した。原稿発表の場を提供して頂いた御配慮に対して厚く御礼申し上げます。（2014.1.31）